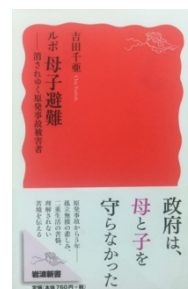


再び『ルポ 母子避難』を読む

写真は2016年2月刊行の岩波新書。表紙帯には「政府は、母と子を守らなかった」と。フリーライターの吉田千亜さんが「消されゆく原発事故被害者」の苦境を伝える。2年ほど前に読み、レポートで紹介したが、再び読みたくなった。



福島第一原発事故から7年半が経つ。原発事故の被害者、とりわけ母子避難を続ける人たちに関心がある。大阪に移ってから、「原発賠償関西訴訟」原告団と支援者の人たちと出会った。裁判の傍聴に出かけ、報告集会で原告と支援者の皆さんの声に耳を傾け、レポートで紹介してきた。フェイスブックなどでも交流を深めている。

この6月に福島第一原発を初めて視察した。いわき市から北の原発地帯に向かった。7月には郡山から福島大学に行った。原発事故のあと、いわきや郡山、福島市なども、放射能にかなり汚染され、多くの人たちが福島県外に避難した。これら汚染地域からの母子避難の苦悩の声、本書に綴られている。郡山駅前と福島大で写真に撮った線量計の数値は、大阪などと比べると、まだまだ高めであった。

本書「おわりに」冒頭から一震災から1年経った2012年、尾川亜子さんから「私たち自主避難者は棄民です」と言われた。「棄民」という言葉は、いまの日本社会では日常とかけ離れている。同じ時代に、同じように子育てをしている母親から、そんな言葉が出てくるとは思っていなかった。私はその場で、思わず「棄民？」と、聞きなおしてしまった。しかし、「私は棄民だ」と感じていたのは尾川さんだけではなかった。その後、多くの避難者たちと知り合うなかで「棄民」という言葉を、何度も聞き続けた。

原発事故が起き、避難指示の有無で人々は分けられた。その後、住む場所の放射能汚染の程度で、人々は再度分けられ、被曝影響に対する個々人の認識の違いで、人々はさらに分断された。避難する人と、とどまる人。とどまった人のなかでも、放射能汚染と向き合う人、本当は気になっているけれど考えないようにしている人、まったく気にせず日常を過ごす人、さまざま。原発事故は福島県だけの問題とされつつある。県境を越えて広がった放射能による環境汚染や、そして、福島県外から避難した原発避難者は、ほとんど無視され続けている。

これらの「分断」は、政府によって年間の許容被曝量が、それまでの年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトへ引き上げられたことによって引き起こされ、さらに、その後の政府の政策や東電の賠償の差により、深くなっていった。そして、「復興」という希望に満ちた言葉の裏で、原発事故の被害は置き去りにされていく。「棄民」という言葉は、こういった構造から発せられている。

さらに、国は東京オリンピック開催の2020年を見すえて、避難指示解除や賠償の打ち切り、そして自主避難者の住宅支援を打ち切る方針を固めた。こうしていま、切り捨てられる人々の幅が広がっている。
(2018年9月9日)